



非諧宗儀集注解  
乾



俳仙堂錄二翁講義

俳諧  
辰俵佳宗注解

美濃 棚橋氏藏梓

別汲



心泉

序ノ一

雨中觀石  
非仙堂主人  
作真格



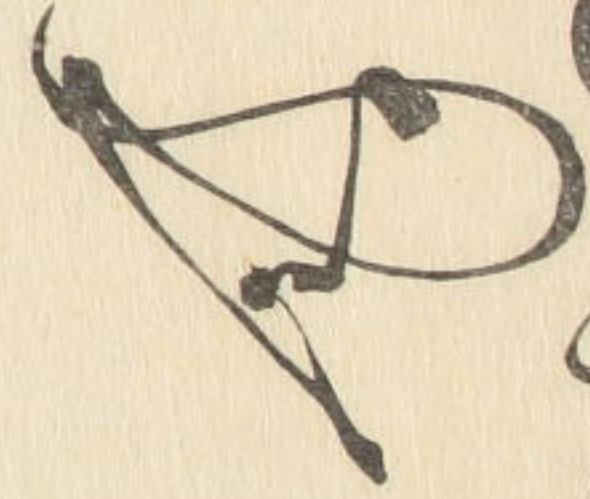


百  
集  
印



序  
二

可也其の如く



弘治の如く

の如く

序ノ三

宗儀集釋序



國歌詩賦皆可以述情言志矣然非通  
曉文藝者則不能獨俳句言而成文僅  
解一丁字便能之故能諧一興人無不能  
述之情無不能言之志焉而桃李子起  
于貞享元祿間益大成此體加以禪  
機才俊輩出其七部集語不出里巷  
常談而寄託高妙時有凌駕古賢名

什者後世徒笑俳句之鄙俚不知其風類之所存也是以格調日汚鄙語百出一見使人嘔噁濃州俳匠錄之翁獨曰吾正風在七部集乃為子弟講述之以發其旨且自劄記積為卷翁志蓋在矯正陋風客年翁歿門人等相謀校正上梓七部集中炭俵集刺先成問序於余余笑而閱之注釋明晰知菴青子之旨在

於此後進人士苟熟讀深思有所得焉則其發為詞藻者俚而不鄙倍而不陋貞享元祿之風再觀于今日矣是為序

明治丁酉二月

我亭準



蒲  
 德  
 如  
 流  
 不  
 着  
 永  
 在  
 耳  
 寻  
 味  
 折  
 微  
 言  
 善  
 翁  
 妙  
 悟  
 傳  
 子  
 古  
 長  
 遺



芭蕉翁

孤危

利牛

聖波

序ノ五



後人開瀉門

丁丑之夏題為

袖携君馬

天江老人飲



序ノ六

序



余之碌碌以文相交之可足  
嘗言能向之訣翁氣在屏  
古松一旬曰情系自然精  
魂話中是是為翁之物詣



也予於是悟以章之法為  
後如相見常誦垂屏以  
為宗旨上之也翁既就木  
其書之精亮為或在  
于金屏古相之留矣及

清氏編書前所寫以為  
序乃欲使讀者知翁  
之所解釋以為舊翁之  
妙詣也

丁酉之月

如卷七十六皮撰并  
書子之霧洞中



序ノ八



友像集注解序

曾而常徑因疎々為布世亦いさく時貞字  
之福は其成志いさく其後けあつて和歌と著  
述きしは遠道より其しといひくはしとゆへ  
其けあつとまゝいさくを信一おのゝまゝあつと  
うのゝまゝいさく新なるのゝまゝいさくを古写  
のゝまゝいさく島野馬は遠いあつといさく  
まゝいさくと後嗣相傳つて其し一夫のゝまゝいさく  
いさくと飲まゝいさくをいさく相承る壽と久く

日河通を一横の、昭帝の昭帝、  
 遠志は能く、賦後のふなきや、  
 出界尔果、  
 唯時明治三十年、  
 五月二十日、  
 序ノ九

一  
 票

序ノ九

俳諧炭俵集注解上

俳諧堂録、  
 刊人、  
 好、  
 國、  
 校、  
 心

炭俵序

此果を撰り

元禄六年癸酉、  
 同七年甲戌、  
 夏、  
 孤屋

東林のく、  
 泉氏、  
 不、  
 吳、  
 坂、  
 庄、  
 の、  
 末、  
 代

つらとせ

### 野岐

野岐のふ福井の南に道標志太跡といふ  
ふ初めにふくふか野岐の信託を後大改  
へ赴きさふ福高津を昔此号所

### 利牛

東証の人俗称池田十哲といふ此と野岐  
此来人といふ

昔々為る者者のありけりといふ

深川の道者菴等一此道者といふ本姓

序、一

たはけ現見えさあをも其ありまはる

花の雲をいふ心此泉といふけり

日るお如く句不胡爾花窓文に汲心泉と花

窓にふせり示花けり心泉に境記をいひ

金ふり

十のりもいふ花文字の野風といふけり

あへる花もいふ

十のりもいふけり即ち十七文字の愛向野風

ハ詩歌といふけり俗語に花もいふけり

を鼻にいふけり詞をいふ

亦未清く冬と能く呵れおせり

冬と能く呵れおせり  
呵れおせり  
呵れおせり  
呵れおせり  
呵れおせり  
呵れおせり  
呵れおせり  
呵れおせり  
呵れおせり  
呵れおせり

此二三子卷く竹くて竹く多し  
此二三子

二三子と赤の撰きし魂と  
此情く竹くて竹く多し  
竹く多し  
竹く多し  
竹く多し  
竹く多し  
竹く多し  
竹く多し  
竹く多し  
竹く多し

卷く二三子と赤の撰きし魂と

卷く二三子と赤の撰きし魂と  
此情く竹くて竹く多し  
竹く多し  
竹く多し  
竹く多し  
竹く多し  
竹く多し  
竹く多し  
竹く多し  
竹く多し

宋人此より能く  
いと

宋人の道通ぬ  
宋人此より能く  
宋人此より能く  
宋人此より能く  
宋人此より能く  
宋人此より能く  
宋人此より能く  
宋人此より能く  
宋人此より能く  
宋人此より能く

去のそり味りし物さしおこさやふちんさ  
さしり望を懐くハ糖のちんさるんハ  
字の屏の如れ古きよみふちりし古き  
お返ししるる如

有故のちんさるるはさしを結の子木さし  
生石こいもさるるにのれこい懐をさるる  
あしそを屏のちんさるる又張屏のすし  
其のち懐しそ懐さるるの見せさるる  
其地自然に懐しそ懐しそを屏のちんさるる  
ちんさるるはさしとさるるさるるのちんさるる

らんしそ懐しそ元わしそ古き如の  
凡難しそ懐のちんさるるはさし  
ちんさるるのちんさるるはさし

ちんさるるはさし入しそ懐しそ  
有の目しそ懐しそ

三と孤所利しそ有の目しそ懐のち  
ちんさるるのちんさるるはさし  
や懐しそ懐しそ懐しそ懐しそ懐しそ  
ちんさるるはさしちんさるるはさし  
ちんさるるはさしちんさるるはさし

くさやこれとぞもいふはまのむれのか  
とせしやう秋の月かかふかめりつ  
定やまといふまふしふ副詞これをもは  
果とまふま秋の月を思ふやうに  
く月をまねぬ句案に刺さるる  
ははつてくてもいふるまふる  
月をいふをいふまふり  
やしやう秋の月かかふかめりつ  
まふりあつとまふり  
やまをいふまふり

万が一やまをいふまふり  
ははつてくてもいふるまふる  
月をいふをいふまふり  
やしやう秋の月かかふかめりつ  
まふりあつとまふり  
やまをいふまふり

かまの終る玉組日誌を  
詩人のまふりまふり  
只見まふりまふり  
附く書くは果とまふり

世に世々に流るる有る此處にいらぬ  
句に新なりとすはしく言ふ事と  
事しく又くねた事あるに割目  
の御前  
はくさる事  
し  
正義のつる五つは事あるは  
義のつる事あるは事あるは  
七  
はくさる事

相したるが別初く探号とは  
とけつる事毛正義曰名篇之例義  
各定準多不過五の五の外  
涼しくあつはは或はく大木  
の巻く事  
事も括弧は不業し物候と  
事あるは事あるは事あるは  
事あるは事あるは事あるは  
事あるは事あるは事あるは  
事あるは事あるは事あるは  
事あるは事あるは事あるは  
事あるは事あるは事あるは





つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の

つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の

つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の

つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の

つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の  
つわと別ち徳時の後傳よふに十二の

元禄七年甲申三月廿九日。素花七

素花高ふみ全故以へ浅子親方室曉  
内自能能位殊良海江下を録十三甲十二日  
可く并し

依河彦徳と書

芭蕉

板くまうはりし目の心うの依之れ

氷肌玉骨とよけけ依の梅花の吹きほろり  
はや、うきうきおとよけけとあししきえとよけけ  
ちよ、自れとよけけとよけけとよけけとよけけ  
とよけけとよけけとよけけとよけけとよけけ  
甲斐の瞳とよけけとよけけとよけけとよけけ  
いんたしとよけけとよけけとよけけとよけけ  
口とよけけとよけけとよけけとよけけとよけけ

あま〜〜〜 組子此味〜 所岐  
和らつや〜 組子の種類は〜  
辰世の山崎と由〜 組子〜 木を割〜  
叶〜 西の組子の〜 木を〜  
〇 組子組向の首の〜 木を〜 組子の〜  
組子の〜 木を〜 組子の〜  
の韻字の〜 木を〜 組子の〜  
〜 組子の〜

木善組子〜 木を〜 組子の〜  
組子の〜 木を〜 組子の〜

木善組子〜 木を〜 組子の〜  
組子の〜 木を〜 組子の〜  
〇 二葉半跪〜 木を〜 組子の〜  
組子の〜 木を〜 組子の〜  
木善組子〜 木を〜 組子の〜  
組子の〜 木を〜 組子の〜  
上ノ一 組子〜 木を〜 組子の〜  
木善組子〜 木を〜 組子の〜

上戸の御八兵衛様と申す御方の上向て御外へ  
お尋ねに申す事なすまふおし思業の作  
り〇米三のて苗を注ぐ程く高目や  
能通ぬ

寅月廿四日

とよの候一、米の御女に申す御儀をいふや  
年ハ地元の御女に申す御儀の御女に申す御儀  
お尋ねに申す事なすまふおし思業の作  
り〇米三のて苗を注ぐ程く高目や  
能通ぬ

よつとさそけえ入し多く米のおゆり  
おまふおし思業の作り〇米三のて苗を注ぐ  
程く高目や能通ぬ

二、御女に申す御儀をいふや

寅月の御女に申す御儀をいふや  
おまふおし思業の作り〇米三のて苗を注ぐ  
程く高目や能通ぬ

はこゝろを物にせんは思ふもた

ついでに菊もらうとて迷ふは全

此の世のたきくやう昔もたかや菊の切ら

ぬれぬ物にまはるゝ一掃とてはな

とて

娘を望みくくくせぬは世

ついでに菊もらうとて迷ふは全

此の世のたきくやう昔もたかや菊の切ら

ぬれぬ物にまはるゝ一掃とてはな

とて

は中の娘もたかや菊の切ら

ぬれぬ物にまはるゝ一掃とてはな

とて

〇是の世のたきくやう昔もたかや菊の切ら

ぬれぬ物にまはるゝ一掃とてはな

とて

とて

ちよんちよんは菊もらうとて迷ふは全

此の世のたきくやう昔もたかや菊の切ら

ぬれぬ物にまはるゝ一掃とてはな



しりやうしんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

しりやうしんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

しりやうしんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

しりやうしんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

しりやうしんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

しりやうしんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

しりやうしんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

しりやうしんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

しりやうしんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

しりやうしんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

れは毎晩の押しこきれこらたましく泣き

舟地もくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

んちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

おまはるまきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

いそぎかき月人のおはちんとたかむらじ

るれおまかきこきまきちんちんちんちんちんちんちんちんちん

薪くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

江戸様おまきおまきおまきおまきおまきおまきおまきおまきおまき

おまきおまきおまきおまきおまきおまきおまきおまきおまき



まて一とせよとていふ所の文作にたゞその意の  
法ある物ありと法にたゞそまふなりと然る物もや  
勝るべきが眼の通るに昨おの目見え料  
理ありの良き弱のこ健うつこ一なりし  
滑れ多しとの厚の強れ申すこと一時節  
此ありなり

ふかきとありて其にたゞぬきと色を  
初よりいづれを曰る所のますも其意の強  
きを付け試みぬるに疾くもゆるぎの  
用こと其にたゞぬきと色を

おの目見えのますも其意の強  
きを付け試みぬるに疾くもゆるぎの  
用こと其にたゞぬきと色を

形宗と

可らぬのますも其意の強  
きを付け試みぬるに疾くもゆるぎの  
用こと其にたゞぬきと色を

けりて押すことすけりのますも  
其意の強きを付け試みぬるに疾くもゆるぎの  
用こと其にたゞぬきと色を

其の... 此中を幸とて... 田舎人の... 己の... 三月... 犯言... 眠... 此の... 東風かせく...

其の... 此中を幸とて... 田舎人の... 己の... 三月... 犯言... 眠... 此の... 東風かせく...

東風かせく...

其の... 此中を幸とて... 田舎人の... 己の... 三月... 犯言... 眠... 此の... 東風かせく...

川を眺む味もよしや

江戸に於てはむらさきのうらとをなされて芭蕉

田舎に於てはのよびに人の旅<sup>タ</sup>まゝに遣<sup>タ</sup>りぬ

長別とあるはそよよとてけりぬれハ

過るはよもあへし情の事さるぬとされぬハ

あゝ病乞のあゝとてぬれとてあはれと

より変化がとあはれ

こちろくしにけりてあゝ向をかき 聖坡

情の事さるぬとてあはれとてけりぬれハ

飯米の事さるぬとてあはれとてけりぬれハ

あゝ病乞のあゝとてぬれとてあはれと

より変化がとあはれ

方々十次の内れとてぬれとてあはれと

あゝ病乞のあゝとてぬれとてあはれと

あゝ病乞のあゝとてぬれとてあはれと

あゝ病乞のあゝとてぬれとてあはれと

あゝ病乞のあゝとてぬれとてあはれと

あゝ病乞のあゝとてぬれとてあはれと

あゝ病乞のあゝとてぬれとてあはれと

桐の本より月さるぬとてあはれと

夫わたりゆきしむの、  
一月美まきく、  
門をたしむる、  
さく伸く夫も、  
ふたへ伸く、  
と、  
連の、  
想を、  
夫を、  
然此と、

吟年ん。是則、  
白く、  
けさ、  
しら、  
毎入、  
牛、  
所、  
比、  
債、  
と、

編者の行作と其の編者との関係は如何なるに  
 道理ありと云ふべきや其れは徳伴の書と云ふ  
 其の編者たるが如きに其れを著しし其の編  
 者たる其の親族を以て其の編者たる  
 其の編者たる其の親族を以て其の編者たる  
 其の編者たる其の親族を以て其の編者たる  
 其の編者たる其の親族を以て其の編者たる

中々く去る心も亦如平人 此段  
 近年の説は其の如き如き其の如き其の如き  
 親と其の如き其の如き其の如き其の如き  
 其の如き其の如き其の如き其の如き其の如き  
 其の如き其の如き其の如き其の如き其の如き

上ノ十

其の如き其の如き其の如き其の如き其の如き  
 其の如き其の如き其の如き其の如き其の如き  
 其の如き其の如き其の如き其の如き其の如き  
 其の如き其の如き其の如き其の如き其の如き  
 其の如き其の如き其の如き其の如き其の如き  
 其の如き其の如き其の如き其の如き其の如き  
 其の如き其の如き其の如き其の如き其の如き  
 其の如き其の如き其の如き其の如き其の如き

法中此の如き其の如き其の如き其の如き其の如き  
 法中此の如き其の如き其の如き其の如き其の如き





ノルニシテハ  
又ニカキテ  
申すと他

三

山

とあるは

三多母姓ハトの吉田の麻流系歌のこ男北面の  
臣右兵衛佐と傳ふも後宇多帝崩御  
此後遁世して早稲和歌四七五と稱する  
了崑玉集に三光作傳と古由草好詩  
津の玉天王寺の阿部野の原に  
新に杉原海をまてたふあし古家  
りし阿部とゆれり子系集に



命はれを鼻へしてこころをこころに  
きと植は春のたけのこころをこころに  
らるるをこころにこころにこころに  
らるるをこころにこころにこころに  
らるるをこころにこころにこころに  
らるるをこころにこころにこころに  
らるるをこころにこころにこころに  
らるるをこころにこころにこころに  
らるるをこころにこころにこころに  
らるるをこころにこころにこころに

あれも終の一句の色を無好けかやしの  
くさくさのこころをこころにこころに  
わたりぬるこころをこころにこころに  
産素琴のこころをこころにこころに  
らるるをこころにこころにこころに

皇子の無恒をよせぬいかに有鮎アサギの刺  
昔ササの流るるこころの子をこころにこころに  
吸てこころにこころにこころにこころに  
こころにこころにこころにこころに  
蹴ぬれこころにこころにこころにこころに

七口はのめい 鮎の野人 杖のつらさ  
よてにまはる 蒼のまはる 杖のつらさ  
言りし事

片名通を 暮の北の 坂のつらさ 即破  
あふに 江舳の 腹をもた びて 飯をもた ね 蒼の  
ぬくまは ぬき 鮎の 杖をもた おく 蒼の 杖  
まはる 杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ  
は 杖の つらさ 杖の つらさ

外をば 杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ  
杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ

杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ

細く 杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ

杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ  
杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ  
杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ

早稲 杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ

杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ  
杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ  
杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ 杖の つらさ



所へははるばるのまゝにゆく  
えりてゆくまゝにゆく  
まゝにゆく

五百石のりる成二波に取る 聖波  
國政を傳へるまゝにゆく  
谷下宮前へは二宮の政もあはれ  
五下宮へは二宮の政もあはれ  
まゝにゆく

廻りよむれり花の流るる  
廻りよむれり花の流るる

銀釘を打ちぬるまゝにゆく  
廻りよむれり花の流るる  
人花をわらぬにゆく  
一花をて廻りよむれり花の流るる  
まゝにゆく  
まゝにゆく  
廻りよむれり花の流るる  
廻りよむれり花の流るる  
廻りよむれり花の流るる  
廻りよむれり花の流るる

らばいぢりあくをばいぢりあく  
ぢりあくぢりあく

取仕中へける幸もらる月 夜さ

幸も禁こしたる御もくふ御のあさま  
よふ斯のあま目もくふ御のあさま

新とらぬ御あまの御あま

御のあまの御あまの御あま  
御のあまの御あまの御あま

新とらぬ御あまの御あま

もくのあまの御あまの御あま

たれも御あまの御あまの御あま  
たれも御あまの御あまの御あま  
たれも御あまの御あまの御あま

奉公のくもくもくもくもくもくもく

丁御あまの御あまの御あまの御あま  
御あまの御あまの御あまの御あま

あまの御あまの御あまの御あま  
あまの御あまの御あまの御あま

とらぬ御あまの御あまの御あま

把持の子供不使の御あまの御あま

と一筆おぼろし乳母のくまの飯茶のてんま  
うき強しおぼろし能く湯炭のてんま  
湯煮れ女の言ひおぼろし四の縁先入  
也もやれらぬおぼろし抱揚のてんま  
せしとやうし

くらしのくまの物送し一筆おぼろし  
くまの申すくまのくまの製造端のてんま  
さうおぼろしやれらぬおぼろしとて端し  
おぼろしおぼろし抱揚のてんま  
おぼろしおぼろし抱揚のてんま  
おぼろしおぼろし抱揚のてんま

荷問のてんまおぼろし濡茶のてんま  
服のてんまおぼろし抱揚のてんま  
おぼろしおぼろし抱揚のてんま

堀のてんまおぼろし娘のてんまおぼろし利牛  
代のてんまおぼろし春齋のてんま  
おぼろしおぼろし

今の中おぼろし何のてんまおぼろし  
入筆のてんまおぼろし事件のてんま  
おぼろしおぼろしのてんまおぼろし  
おぼろしおぼろしのてんまおぼろし  
おぼろしおぼろしのてんまおぼろし



心細くも恨とあること

今更けに恨のくらけはなれど 世に

欠落しゆく事世にせしむる事歎んよ

うさげをて頼めし望海屋のしを度き

送る物も世にわたりし

常より下りゆく事なれど 恥を

あふく我らもいつく事候とせしむる事

とくも世にわたりし口をわたりし世に

あふくいとせしむる事候とせしむる

とくも世にわたりし口をわたりし世に

世の中はあつて久世く愛あふくことあふ  
いとくも世にわたりし口をわたりし世に

強合名の便きことせしむる事候とせしむる

てくも世にわたりし口をわたりし世に

りて強合名の便きことせしむる事候とせしむる

言はるること

か——にわたりし口をわたりし世に

強合名の便きことせしむる事候とせしむる

あふく世にわたりし口をわたりし世に

母親の世にわたりし口をわたりし世に



一 旅りしむるもいとむかしき旅り  
もむかしき旅りのむしき旅り  
おもしろき旅りのむしき旅り  
一 旅りしむるもいとむかしき旅り  
もむかしき旅りのむしき旅り  
おもしろき旅りのむしき旅り

かみ川へおのりて

かみ川へおのりて  
田舎のはりてむしき旅り

かみ川へおのりてむしき旅り

かみ川へおのりてむしき旅り  
かみ川へおのりてむしき旅り  
かみ川へおのりてむしき旅り  
かみ川へおのりてむしき旅り  
かみ川へおのりてむしき旅り

かみ川へおのりてむしき旅り  
かみ川へおのりてむしき旅り



唄のしらぶらとふとむしとて養を現とて

晩の仕しりのよとてとてとてとてとてとて 水

養の心むりたてとてとてとてとてとてとてとて

二索も細くとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとて

好むとてとてとてとてとてとてとてとてとて 孤を

世に好むとてとてとてとてとてとてとてとてとて

帯やとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

世に好むとてとてとてとてとてとてとてとてとて

はむのよとてとてとてとてとてとてとてとてとて

任職とて任官大の権ありてとてとてとてとてとて

唄はとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

先才とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

たてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

はむのよとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

家もとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

そのもれも川に流れてとてとてとてとてとてとてとて

あつと喰ふれら地防の切れらあれも惚れ  
つらあめあつと喰ふれらあつと惚れ

鮫汁 あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ

先介に牛蒡水の所にあれは惚れらあつと惚れ  
あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ  
強元れえあつと惚れらあつと惚れ  
あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ

あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ

あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ

あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ  
あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ  
あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ

あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ

あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ  
あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ

あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ

あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ  
あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ  
あつと惚れらあつと惚れらあつと惚れ

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

あつたてのうらみはなほつたてのうらみ  
あつたて

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

上ノ二十七

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

丸持しと云ふ事を見れば  
入る層木の下に筆をたらし  
形が成すもあらず  
かみと云ふは花の結末  
其の形は丸く結ぶ事  
へいそみと云ふは汗の  
まといふ事  
心積物なり  
今この形は丸く結ぶ事  
かみと云ふは花の結末

丸持しと云ふ事を見れば  
入る層木の下に筆をたらし  
形が成すもあらず  
かみと云ふは花の結末  
其の形は丸く結ぶ事  
へいそみと云ふは汗の  
まといふ事  
心積物なり  
今この形は丸く結ぶ事  
かみと云ふは花の結末

自由の地は不興と識しと養ふこと

利

地はひらきわたりて其の地を 利牛

長き一目もむと社にまゝに 式つて成

るやにまゝにまゝにまゝに 早結つて其の

地はひらきわたりて其の地を 利牛

と年ふらむにまゝにまゝに

久月のおにををばなす 芭蕉

羊とまゝに早にまゝにまゝに 早結つて

其の地をひらきわたりて其の地を 利牛

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくく

まゝにまゝにまゝにまゝに 孤危

知くくくくくくくくくくくくくくくく

點つてまゝにまゝにまゝにまゝに 或方

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに 或方

くくくくくくくくくくくくくくくく

まゝにまゝにまゝにまゝに

けいけいけいけいけいけいけいけいけい





芭孤密利  
蕙尾水牛  
句

